様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００５１３

研究課題名（和文）バルト、ブランショ、デリダにおけるエクリチュール概念と発話理論の関係

研究課題名（英文）The Relations between the Notion of Ecriture and the Theory of Enunciation in Barthes, Blanchot, Derrida

研究代表者
郷原　佳以（Gohara, Kai）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：９０５２９６８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：バルト、ブランショ、デリダにおけるエクリチュール概念と発話理論の関係を明らかにするという目的に沿って、主として以下の研究を行った。
（1）バルト「「書く」は自動詞か？」をデリダの発言と比較検討した。バンヴェニストの中動態論文を精査し、非人称的な文学言語と中動態の差異を明らかにした。バルトとブランショのエクリチュール論を比較検討した。（2）形而上学的隠喩論のデリダによる脱構築や、デリダが従来の哲学とは別の語りを模索したことを明らかにした。（3）ブランショのエクリチュール概念の背後にヘラクレイトスの断片的な言葉があること、ポーラン『タルブの花』の常套句論とブランショの文学論との関係を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
バルト、ブランショ、デリダは共に「エクリチュール（書くこと）」を鍵概念とした20世紀フランスの文芸評論家・思想家だが、彼らのエクリチュール概念が比較検討されることはなかった。本研究は、彼らのエクリチュール概念が、同時代に隆盛したバンヴェニストらの発話理論との関係においてそれぞれ異なる立場を取っていたことを明らかにし、そこからそれらの相違を取り出した。さらに、彼らだけでなくナラトロジーやノン・コミュニケーション理論などについても、発話理論との関係で、従来与えられていなかった位置づけを行い、新たな見取り図を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：With the aim of clarifying the relationship between the concept of writing and the theory of discourse in Barthes, Blanchot and Derrida, the following main studies were carried out.
(1) Barthes' 'ecrire, verbe transitif?' was compared with Derrida's discourse. An in-depth examination of Banveniste's article on the midle voice revealed the differences between impersonal literary language and the middle voice. Barthes' and Blanchot's theories of writing were compared and examined.(2) Derrida's deconstruction of metaphysical theory of metaphor and Derrida's search for an alternative narrative to conventional philosophy were clarified.(3) The fragmentary language of Heraclitus behind Blanchot's concept of writing and the relationship between Paulhan's theory of the commonplace in Les Fleurs de Tarbes and Blanchot's literary theory were clarified.

研究分野：フランス文学

キーワード：ロラン・バルト　モーリス・ブランショ　ジャック・デリダ　エクリチュール　発話理論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

ブランショは 1940 年代に、カフカの日記を通して「書くこと」をめぐる執拗な考察を開始した。そのきっかけになったのは、共有しえない特異な経験を共通の言語で書くこと（「私は孤独だ」）は滑稽だが、「私」を「彼」にすることで、特異な経験の表現が誰のものでもないものとして可能となり、そこで文学が始まるというカフカの所感だった。ブランショはそこから、マラルメ、ヴァレリー、ジッドらを論じながら、三人称＝非人称と文学言語のエクリチュールの関係について考察を続けた。その「三人称」は文法的な意味での「人称」を超えて、たとえ一人称小説であっても文学言語のなかから聞こえてくる誰のものでもない「非人称の声」として、50 年代には「彼＝それ」や「姿のない誰か」、60 年代には、語り手の声ではない「語りの声」や「あいだにある対話（entretien）」という名のもとに追求された。「あいだにある対話」概念は対話体テクストにおいて提示されており、それは、二人の「彼」が間に三人目の人物がいるかのように、その人物の方を向いて語り、言葉が二人の間に滞留し続けるというものである。これらの概念によって追求されているのは、「私」と「あなた」が相互依存的に成立する、現前する人物同士の発話による対話とは異なる次元で文学言語のエクリチュールを思考することである。

　ブランショがカフカの書簡に着目したのと同じ頃、言語学者エミール・バンヴェニストは「動詞における人称関係の構造」において、発話の現在において発話者を指し示す一人称および一人称と鏡像的関係にある二人称と、三人称の間には決定的な断絶があり、三人称は人称の機能を果たさないと論じた。彼はその後の数々の論文においてもこの見解を展開させ、「「私」と言う者が「私」なのである」（「言葉における主体性について」）という著名な言葉を発するに至る。また、発話の現在において話し手から聞き手に向けられる発話を「ディスクール」、発話の現在に関わりのない歴史叙述や小説の言語を「レシ」と呼んで区別した。このバンヴェニストの発話理論を、バルトに代表される構造主義文学批評は文学理論に大いに援用した。その援用の仕方は、バンヴェニストが想定したように「レシ」を文学言語に対応させるのではなく、一人称による「ディスクール」を「現代文学」のエクリチュールの様態に見出すというものだった。かくして、バルトは「書くは自動詞か？」や「作者の死」などにおいて、「ディスクール」をめぐる上記のバンヴェニストの理論を「エクリチュール」に適用するようにして、作者の権威をもたない現代文学においては「主体はエクリチュールとともにただちに構成され」、「あらゆるテクストは永遠にいま、ここで書かれる」と論じた。文学言語を「ディスクール」によるコミュニケーションモデルで捉えるこの考え方は、ジェラール・ジュネットのナラトロジーにも引き継がれた。

　このように、エクリチュールを作者の権威から切り離して思考したという点では共通しているとしても、ブランショとバルトのエクリチュール概念には、その発話理論との関係性において大きな相違がある。しかし、ブランショは、こうした同時代的なバンヴェニストやバルトの動向に対し、「語りの声」で暗示的な言及を行っているものの、直接的に批判的な論及をすることはなかった。対して、構造主義文学批評における発話理論の援用および発話理論と通底するオックスフォード学派の言語行為論に異論を突きつけたのは、デリダである。デリダは 1966 年に構造主義者を集めたコロキウム「批評言語と人間科学」において、「私」という語が発話において言語行為を為すためには「私」がすでに反復の可能性によって構成されていなければならないと指摘し、「私」はそのつど絶対的な特異性に関わっているというバンヴェニスト－バルトの思想を批判した。この批判は翌年発表される『声と現象』のフッサール批判や『グラマトロジーについて』などで展開されるエクリチュール論と通底している。デリダはさらに、1971 年には「署名出来事 コンテクスト」において、「作者の死」でバルトが参照しているＪ・Ｌ・オースティンの言語行為論を、行為遂行性の発見自体は高く評価しつつ、その成立条件に見られる現前性の特権化において批判した。この批判は 1978 年以降、オースティンの弟子を自認するジョン・サールとの間で論争として続いていくことになる。

　このように、発話理論との関係性という点において、ブランショやデリダとバルトのエクリチュール概念は異なっていると考えられるが、このような観点は従来示されてこなかった。発話理論との関係において三者のエクリチュール概念、および、ナラトロジーなどの同時代の潮流の錯綜を解きほぐす必要があった。

２．研究の目的

（1）バルト、ブランショ、デリダ各々のエクリチュール概念を精査すると共に、
（2）1960 年代におけるバルトとデリダのエクリチュール概念と発話理論の関係を明らかにすること。
（3）中動態をモデルとするバルトのエクリチュール概念と非人称的なものであるブランショのエクリチュール概念の相違を明らかにすること。

３．研究の方法

（1）バルトの「「書く」は自動詞か？」等の論文をバンヴェニストとの関係において分析する。デリダの『プシュケー――他なるもののインヴェンション』所収論文を精査し、「インヴェンシ

ョン」概念を通してデリダが「インヴェンション」概念を通して、従来の哲学とは別の語りを模索し、そこで言語行為論を参照しつつ距離を取ったことを探る。
（2）バルトの「「書く」は自動詞か？」を、この講演に対するデリダの発言や『声と現象』と比較検討する。
（3）中動態に関するバンヴェニストの論文を精査し、中動態と非人称的な文学言語は同じなのか異なるのかを明らかにすることで、バルトとブランショのエクリチュール概念を比較する。

４．研究成果
バルト、ブランショ、デリダにおけるエクリチュール概念と発話理論の関係を明らかにするという本研究の目的に沿って、主として以下のような研究を行った。
（1）1960 年代において言語学者エミール・バンヴェニストの発話理論が文学理論家たちによっていかに相矛盾する仕方で受容されたかを整理した上で、発話理論をエクリチュール論に応用しようとするバルト「書くは自動詞か？」を、1966 年のデリダの発言および翌年の『声と現象』での議論と比較検討した。そこで焦点となったのは、「私は死んでいる」という言葉をめぐる係争である。バルトはこの言葉を発することは不可能であるとしたが、デリダはこの言葉の発話可能性が真の言語行為の条件であるとした。この係争の分析から、発話とエクリチュールの関係に関する両者の相違を浮かび上がらせた。さらに、デリダのバンヴェニスト論「繋辞の代補」を分析し、言語と思考の関係を反映や置き換えの関係として捉える言語学者の反形而上学的形而上学に対するデリダの問題視を明らかにした。（「「私は書く」の現前性から「私は死んでいる」の可能性へ――バルト、バンヴェニスト、デリダ」２～４）。
（２）デリダの反形而上学的形而上学批判の様相をより明瞭にするために、隠喩論をめぐる論文「白い神話」の分析に取り組み、その新たな読解を提示した。第一に、アナトール・フランス「アリストとポリフィル――形而上学的言葉遣い」やヘーゲルの隠喩論などに対するデリダの読解を検討し、「形而上学的言語は色褪せた神話＝隠喩にすぎない」という見解はデリダが脱構築する形而上学的隠喩論であることを明らかにした。また、隠喩にすべての比喩形象を収斂させようとする同時代の傾向にデリダが否定的であったことも明らかにした。（「「白い神話」という神話」「一般的隠喩論の不可能性へ向けて」）さらに、デリダは「摩滅＝利子（usure）」という語によって、形而上学的な類似に基づいた隠喩概念を機能不全に陥らせる「絶対的摩滅」の可能性を追究したこと、デリダはアリストテレス隠喩論の形而上学との密接な繋がりを暴いた上で、形而上学の支配を穿つ破局的な転義運動を追究したことを明らかにした。（「摩滅と類比のエコノミー」「形而上学の壮大な連鎖、あるいは、星を太陽とみなすこと」）
　また、1980 年代デリダの「プシュケー」や「黙示録でなく、今でなく」などの分析によって、この時期のデリダが言語行為論の一部の命題に疑義を呈しながら、「インヴェンション」概念を系譜学的に再考し、他なるものを我有化するのではないいかなる語りがありうるかを探究していたことを明らかにした。（「他なる語りのインヴェンション」「アポカリプスとインヴェンション」「発明の再発明の夢」）また、「他なるもののインヴェンション」とは、自己反照的で鏡像的なエコノミーに寓話的で途方もない（fabuleux）錯綜をもたらすものであることを明らかにした。（「鏡を割るプシュケー、アイロニーのアレゴリー」「黙示なき破局の寓話」）さらに、デリダのポール・ド・マン追悼講演録『メモワール〔記憶＝報告書＝回想録〕』の読解を通して、デリダが記憶や喪の問題をめぐってド・マンのアレゴリー論やヘーゲル論、自伝論などを参照し、応答しながら考察を展開していたことを論証し、両者の共通性と差異を明らかにした。（「「メモワール」の保持と欠如」「「プロソポペイア、未来からの遂行的発話」「虚構と真実の間の滞留」」
（3）バンヴェニストの中動態についての論文を精査すると共に、文学や哲学の理論におけるその援用の是非について検討した。また、バルトの「「書く」は自動詞か？」の再検討を通して非人称的な文学言語と中動態の差異について論じた。（「「中動態と非人称」」
（4）1960 年代におけるバルトとブランショのエクリチュールをめぐる考察の比較検討を行った。第一に、バルトは言語学者バンヴェニストの中動態をめぐる研究とディスクール理論とを併せて文学理論に援用し、発話理論的観点で文学作品を読むことを提案した。対してブランショは文学の言語をコミュニケーションモデルで捉えることに違和を示し続けた。第二に、両者ともに書くことをめぐるフローベールの葛藤に大きな刺激を受けてエクリチュールについての思考を深化させた。フローベールを通して、バルトは無限の訂正行為による文体の追求に、ブランショは何ものをも内包しない未知の言語に巻き込まれることにエクリチュールを見出した。（「中動態と非人称」「バルトとブランショにおけるフローベール的エクリチュール」）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計18件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 郷原佳以	４．巻 702
２．論文標題 「デリダの文学的想像力13　鏡を割るプシュケー、アイロニーのアレゴリー」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『みすず』	６．最初と最後の頁 40-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 郷原佳以	４．巻 49-7
２．論文標題 「黙示なき破局の寓話――核時代の脱構築」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『現代思想』	６．最初と最後の頁 174-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 郷原佳以	４．巻 704
２．論文標題 「デリダの文学的想像力14　「メモワール」の保持と欠如」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『みすず』	６．最初と最後の頁 14-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 郷原佳以	４．巻 706
２．論文標題 「デリダの文学的想像力15　プロソポペイア、未来からの遂行的発話」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『みすず』	６．最初と最後の頁 23-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 郷原佳以	４．巻 708
２．論文標題 「デリダの文学的想像力１６虚構と真実の間の滞留」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『みすず』	６．最初と最後の頁 2-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 郷原佳以	４．巻 28
２．論文標題 「ジャコメッティを見るサルトルとブランショ――距離について」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『言語・情報・テクスト』	６．最初と最後の頁 17-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002002991	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 郷原佳以	４．巻 691
２．論文標題 「デリダの文学的想像力8　摩滅と類比のエコノミー――「白い神話」読解3」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『みすず』	６．最初と最後の頁 41-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 郷原佳以	４．巻 693
２．論文標題 「デリダの文学的想像力9　形而上学の壮大な連鎖、あるいは、星を太陽とみなすこと――「白い神話」読解4」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『みすず』	６．最初と最後の頁 47-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 郷原佳以	4．巻 695
2．論文標題 「デリダの文学的想像力10　他なる語りのインヴェンション」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『みすず』	6．最初と最後の頁 34-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 郷原佳以	4．巻 48-11
2．論文標題 「ジャック・デリダ「テレパシー」――テレパシーの試練」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『現代思想　総特集　コロナ時代を生きるための60冊』	6．最初と最後の頁 121-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 郷原佳以	4．巻 697
2．論文標題 「デリダの文学的想像力11　アポカリプスとインヴェンション」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『みすず』	6．最初と最後の頁 35-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 郷原佳以	4．巻 699
2．論文標題 「デリダの文学的想像力12　発明の再発明の夢」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『みすず』	6．最初と最後の頁 36-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 郷原佳以	４．巻 680
２．論文標題 「デリダの文学的想像力３　「私は書く」の現前性から「私は死んでいる」の可能性へーーバルト、バンヴェニスト、デリダ２」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『みすず』	６．最初と最後の頁 14-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 郷原佳以	４．巻 682
２．論文標題 「デリダの文学的想像力４　「私は書く」の現前性から「私は死んでいる」の可能性へーーバルト、バンヴェニスト、デリダ３」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『みすず』	６．最初と最後の頁 26-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 郷原佳以	４．巻 684
２．論文標題 「デリダの文学的想像力５　「私は書く」の現前性から「私は死んでいる」の可能性へーーバルト、バンヴェニスト、デリダ４」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『みすず』	６．最初と最後の頁 12-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 郷原佳以	４．巻 686
２．論文標題 「デリダの文学的想像力６　「白い神話」という神話ーー「摩滅」の形而上学１」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『みすず』	６．最初と最後の頁 2-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 郷原佳以	４．巻 688
２．論文標題 「デリダの文学的想像力７　一般的隠喩論の不可能性へ向けてーー「摩滅」の形而上学２」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『みすず』	６．最初と最後の頁 44-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 郷原佳以	４．巻 120
２．論文標題 「哲学的言説の隘路ーー亀井大輔『デリダ　歴史の思考』についてーー」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『立命館大学人文科学研究所紀要』	６．最初と最後の頁 129-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　9件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 Kai Gohara
２．発表標題 "De la presence de "j'ecris" a la possibilite de "je suis mort" -- Barthes, Benveniste, Derrida"
３．学会等名 7th Derrida Today Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 郷原佳以
２．発表標題 「途切れつつ続く流れ dis-cours――ナンシーとブランショ」
３．学会等名 ジャン＝リュック・ナンシーの哲学――共同性、意味、世界（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 郷原佳以
２．発表標題 「テクストから人外へ――デリダ「蚕」を通して――」
３．学会等名 レクチャーシリーズ「作品とは何か」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kai Gohara
２．発表標題 "'Un livre vivant" et le fetichisme -- Retif chez Blanchot"
３．学会等名 Colloque international franco-japonais "Le revies de Retif de la Bretonne -- Subjectivites, genealogies, morales"（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 郷原佳以
２．発表標題 「微温的な詩人のアイロニーとユーモア」
３．学会等名 原大地『ステファヌ・マラルメの〈世紀〉』合評会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kai Gohara
２．発表標題 "The Mythology of the "White Mythology""
３．学会等名 The American Comparative Literature Association's 2021 Annual Meeting（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 郷原佳以
２．発表標題 "Pour la sensualite non geninitale -- autour du Plaisir efface Clitoris et pensee de Catherine Malabou"
３．学会等名 脱構築研究会「カトリーヌ・マラブーの哲学」シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 郷原佳以
２．発表標題 「供犠的構造をいかに脱臼するか――デリダ「死を与える」から「最後のユダヤ人」へ」
３．学会等名 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 郷原佳以
２．発表標題 「非人称的な特異性のために――ブランショを中心に」
３．学会等名 「文学としての人文知」研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 郷原佳以
２．発表標題 「マジック・メモの時間」
３．学会等名 「吉増剛造の詩業――世界文学の中のGozo Yoshimasu」シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 郷原佳以
２．発表標題 「言語の中動態、思考の中動態について」
３．学会等名 中動態研究会研究集会「言語の中動態、思考の中動態」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 郷原佳以
２．発表標題 「ブランショとドイツ・ロマン主義」
３．学会等名 「フランス・ロマン主義の歴史的展開についての考察――文学、政治、美学」研究会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 郷原佳以
２．発表標題 「「生きた書物」とフェティシズム――ブランショにおけるレチフ」
３．学会等名 レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 郷原佳以
２．発表標題 「世界の終わりに見る夢」
３．学会等名 表象文化論学会第14回シンポジウム「アポカリプスの表象／表象のアポカリプス」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 郷原佳以
２．発表標題 「語りの形　フィクションの始まり」
３．学会等名 PLAYS and WORKS 2019-2020『形』レクチャー（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計7件

１．著者名 蓮實重彦・郷原佳以	４．発行年 2022年
２．出版社 講談社	５．総ページ数 272
３．書名 フーコー・ドゥルーズ・デリダ	

１．著者名 松澤和宏、小倉孝誠、中島太郎、中野茂、三原智子、朝比奈弘治、橋本知子、菅谷憲興、山崎敦、和田光昌、真野倫平、鎌田隆行、木内尭、沖田吉穂、足立和彦、郷原佳以、塩塚秀一郎、西永良成、大橋絵理	４．発行年 2021年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 399
３．書名 フローベール　文学と〈現代性〉の行方	

１．著者名 小野文、粂田文、北條彰宏、荒金直人、熊倉敬聡、郷原佳以、藤巻るり	４．発行年 2022年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 257
３．書名 言語の中動態、思考の中動態	

１．著者名 東京大学教養学部	４．発行年 2020年
２．出版社 白水社	５．総ページ数 202
３．書名 異なる声に耳を澄ませる	

１．著者名 川口　茂雄、越門　勝彦、三宅　岳史	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 442
３．書名 現代フランス哲学入門	

１．著者名 吉田裕	４．発行年 2020年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 267
３．書名 洞窟の経験	

１．著者名 三原 芳秋、渡邊 絵里、鵜戸 聡、郷原 佳以、新田 啓子、他	４．発行年 2020年
２．出版社 フィルムアート社	５．総ページ数 276
３．書名 クリティカル・ワード　文学理論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Kai Gohara
http://detruireditelle.g1.xrea.com/kai.htm

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関